

週日の説教

金 大烈 神父 2010年2月18日(木)

《十字架の意味》

あるところにプライドの高い将軍がいました。戦争で負けてしまい、“こんな恥には耐えられない”という気持ちで森の中に入りました。そして、自殺をしようと考え、今まで自分が歩んできた道を振り返りながらぼんやり周りを見まわしました。すると、一匹の蟻が目に入ります。その蟻は、自分の体の何倍も大きいエサを二つの歯で噛み切り、どこかに運ぼうとしています。将軍はその蟻の動きを見て、自殺しようとしているのさえ忘れてついて行きました。蟻は何度もエサを落とし、その度に噛み切って小さくし、また運びます。そうやって蟻が巣に入るまでを見ました。数えてみると79回もエサを落とし、80回目にやっと自分の巣に持って行きました。それを見た将軍は、深く反省をしました。「たった一度の失敗にがっかりし、自分の命さえ絶とうとした私は、男にもなれないし、あの小さな蟻にもなれない。本当に情けない者だ。」と悟り、もう一度立ち上がって次の戦争には勝ったという話です。

私たちは、この世の全ての人々に（特にカトリック信者ならばなおさら）十字架が与えられていることを知っています。それでも、できればそれを拒みたい気持ちがあると思います。今日の福音(ルカ9・22-25)では、イエス様が「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」とおっしゃっています。しかし私たちは、あまりにも簡単に挫折したり、諦めたり、放棄したりしていませんか。皆様も十字架を捨てたいですよ。私も同じです。しかしイエス様は、「自分の十字架を拒みながらでは絶対に目的までたどり着けない」とはっきりおっしゃっています。

皆様に与えられている十字架は何でしょうか。いろいろあると思います。家族の関係、体のこと、経済的なこと、自分の性格、人々とのかかわりの中で生じるトラブル、いろいろなことがあると思います。そういう十字架が、ただ負うだけのものであれば意味がないと思います。苦痛が苦痛として終わってしまったら、何の意味もないと思います。苦痛に意味を探そうと努力することが、十字架を背負う正しい姿勢ではないかと思います。そういう意味で、私たちはみんな弱い存在です。この痛みをどのように乗り越えられるか考えながら、信仰の道をたくましく歩もうとするとき、十字架はただの重荷ではなく、目的を達成させるすばらしい恵みになるのではないかと思います。

この四旬節の間にもう一度、自分に与えられている十字架の意味を深く黙想できるとよいと思います。

今日の福音(ルカ9・22-25)とは関係ない話ですが、四旬節に入るといつも思い浮かぶのは『悔い改め』ですよ。『悔い改め』の本当の意味は何でしょうか。辞書に書いてあるとおり「反省すること」でしょうか。そうではありません。『悔い改め』という言葉が持っている一番大きい意味は、「神様の愛を体験すること」です。神様の愛を体験するのが悔い改めです。神様の愛を体験できれば、自然に

自分の罪や間違いについてはっきり分かるようになります。ですから、この四旬節に、『悔い改め』ばかりしようとするのではなく、どうすれば本当に神様の愛を体験できるのか、それに取り組むのが賢明な姿勢だと思います。

今日の福音の最後に、イエス様はこのようにおっしゃっています。

「たとえ全世界を手に入れても、自分の身を滅ぼしたり、失ったりしては、何の得があるのか。」

ありがとうございました。